
せいぎの三かた

凄い腹筋の蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せいぎのみかた

【Nコード】

N2252T

【作者名】

凄い腹筋の蛇

【あらすじ】

「僕は、せいぎのみかたに成りたかったんだ。……その言葉を曲解した事によって引き起こされるのは、悲劇か喜劇か……史上最低の聖杯戦争が、今始まる。そして、さっさと終わる。」

月が、出ていた。

縁側に、一人の男が横たわっている。

男は、静かに夜空に浮かぶ月を眺めていた。今日は、珍しく声が聞こえない。久しぶりに、心の落ち着いた夜を迎えた。

もう、長くはないのだろう。

冷たくも優しい光をたたえた月を眺めていると、一人の少年が歩いて来た。

「じいさん、ここにいたのか。」

「ああ、士郎か。今夜はいい月が出てるんだ。」

しばらく、二人で夜空を見上げる。男は、士郎と呼んだ赤毛の少年に、らしくもない昔話を始めた。

「僕はね。昔、正義の味方になりたかったんだ。」

少年は、その言葉を聞いて目を見開いた。しばらく考えると、男に言った。

「せいぎのみかた…略してセミだな！」

「……っせ!？」

「心配すんな、じいさん！」

「え?...いや、え!?!」

「じいさんの夢は...」

「いやいやいや、ちよっ...!?!」

「俺が形にしてやるから！」

イヤアアアアアアアアア!!

数年後、冬木の街のとある魔術師の洋館に、セミの着ぐるみを着た男が降り立った。

「みみみみみみみみつ！」

キヤアアアアアアアア!!

【せいぎのミかた】

衛宮士郎は目の前の光景に圧倒されていた。偶々帰りの遅くなつたその日。彼は誰も居なくなつた学校の用具室を出て、戸締まりを

済ませてから家路につこうとした。そこに飛び込んで来る、信じられない光景。

「なんだ、あれは…!？」

グラウンドで繰り広げられる戦い。全身青タイトの男が繰り出す槍の攻撃を、手足をバタつかせ全て弾き返す一匹のセミ。よく見るとそれはセミの着ぐるみで、バタついてる足は衣装の一部だ。

「チクシヨウ、一体テメーは何なんだ！」

「そうよ、なんでアンタみたいな奴が英雄なのよ！」

よく見ると、二人から離れて立つ女性が。学校のアイドル、遠坂凜だった。

「ふむ、では英雄らしい技を披露しようではないか。」

着ぐるみを着た白髪の男が、後方へ跳躍してタイト男から距離をとる。それまで茶色かった羽が透明にかわり、着ぐるみの色も白と黄緑色に変わった。

「…っ!」タイト男は身構える。宝具か!？」

「俺の歌を聞けええええ!!」

「「?」「」

タイト男と凜がポカンとする。しかし、土郎は分かった。奴は、とんでもない事をしようとしている!

「遠坂、逃げろおおおー!!」

思わず叫ぶ士郎。しかし間に合わなかった。セミ男の口から、恐ろしい呪詛が唱えられた。

「シネシネシネシネシネシネ…」

「……………」

「シネシネシネシネシネシネ…」

「ちっ、遅かったか！これは日本最大のセミと言われる熊ゼミの鳴き声！ずっと聞いてると『死ぬ』と言ってるように思えてきて、最後には聞いた者を自殺へと追いやってしまったという…」

遠坂、聞くんじゃない！死ぬなー!!」

「「死ぬかー!!」」

二人に突っ込まれた。

「くっ！小僧、貴様がネタばらししたからしくじったぞー!どっつてくれる!」

「俺は同級生を助けただけだ！それに、同じセミを目指す者としてお前は許せない！！」

遠坂凜には分かった。

自分の呼び出したサーヴァントの正体。それはこの馬鹿の成れの果てだ。こいつがセミになるなんて思わなければマトモなサーヴァントを呼べたのに！

凜は頭を抱えた。

…この状況でマトモな思考をしていたのはタイツ男だ。一般人に見られた。なら殺すしかない。

タイツ男が、土郎へ向かって走り出す。危険を察知した土郎も慌てて走り出すが、相手はサーヴァントだ。すぐに追いつかれ…

「は、はええ！？」

追いつかれなかった。

土郎は人間とは思えない速さで走り去る。目の前の現実を受け入れられないタイツ男は、しばらく呆然としたが、気を取り直して土郎を追いかけて行った。

実は、土郎は魔術師として今まで過酷な修行を行ってきた。

義理の父の死後、彼は様々な魔術師と出会って多くを学んでいたのだ。彼はその過程で人のレベルを遥かに超越した存在になった。彼を指導した自称魔法使いのお姉さんや世界を渡る爺さん、真相の吸血鬼たちは、彼を自分の弟子として傍に置いておきたがった。しか

し彼はその誘いを断ったのだ。

「俺はセミになるから。」

意味がわからず、彼らは困惑した。そして、ある結論に至る。

(いくら有能でも、こんなアホはいらん)

…これが彼、衛宮士郎の生い立ちである。鍛え上げられた彼は、サーヴァントすら撒いてしまう身体能力を有していた。

少し時間が経ってから我に返った遠坂は、やっと現状を把握した。

一般人を巻き込んだ。魔術の秘匿を守れなかった。それ以上に、今、彼の命が危ない！

「アーチャー、追って！ランサーはアイツを殺そうとしている！」

「私はシンガーだと言ったのだが…」

「うるさい、早く行って！アンタ飛べるんでしょ！」

ふう、とため息をつくセミ男。遠坂に背をむけると、勿体ぶった口調で言った。

「しかしリン、飛ぶのは構わないが。」

「何よ。」ジトツとした目をする。

「飛ぶ際、小便を引つ掛けてしまっても構わんのだろう?」

「構うわよ!」

遠坂の令呪が光を放った。

『小便しないで飛べ』

こんな使い方をしたのは、聖杯戦争の歴史の中でも彼女が初めてだろう。

さて、その頃。 士郎が家に入ろうとすると、不意に目の前に巨大な壁が現れた。

「お久しぶり、お兄ちゃん。」

「イリヤか。また肩車してもらってんのかよ。」

バーサーカーという強力な使い魔の上に乗った、義理の姉。 イリヤ・スフィールだった。

「イーでしょ、これ。遠くが見渡せて気持ちいいの。…ところで、まだサーヴァント召喚してないの? 殺されちゃうよ。」

「ああ、実際殺されかけた。イリヤ、助けてくれ！」

「むー…。」

微妙な顔をするイリヤ。

「あの事、悪いと思ってる？こないだ、私の城の中をセミだらけにした事。」

「えっ…いや、あれはイリヤのために素敵な合唱を贈ろうと…。」

ニコツと笑うイリヤ。

「やっちゃえ、バーサーカー！」

「ー！！！」

「なんでさー！？」

来た道を急いで戻る土郎。向こうから、自分を追ってきたタイツ男の姿が見えた。

「挟まれた！？」土郎に緊張が走る。タイツ男は疾走しながらニヤリと笑った。

「確実に仕留めてやる！」

「ゲイ…。」

「バーサーカーはゲイなんかじゃない！！！」

「ー！！！」

ブチ切れたのはイリヤかバーサーカーか。とにかく怒ったバーサーカーの岩のような材質の武器がタイツ男に振るわれると、タイツ男は真っ二つになって消えて行った。

「待ちなさい！」

「そんなん見せられて待てるかー!!！」

士郎がスピードを上げようとしたその時、上空から一匹のセミが飛来した。

「みみみみみみっ！」

「きゃあ、変態!？」

セミ男はバーサーカーの背中に張り付いた。そして…

ブスッ

「ー!？」

クチバシ部分の針をぶっさした。これは痛い!

「お、お兄ちゃん助けて！」

「む、貴様お兄ちゃんと呼ばせているのか!ニーンと呼ばせればニイニイゼミとしてセミの道を歩めたものを!つくづく惜しい、つくづく惜しい！」

「ツクツクホーシかよ、わかりにくいだろ！」

「――（泣）！」

バーサーカーが何気にピンチだった。

背後に張り付き離れないセミ男、暴れるバーサーカー。イリアは何とか飛び降りると土郎の背後に隠れる。

「ど、どうしよう、バーサーカーがやられちゃう！」

「令呪でどうにかならないか？」

「他の敵との戦いで、あと一つしか残ってないの！」

仕方がない、決死の覚悟で立ち向かうか…土郎が決意しようとした時、遠くから駆けてくる一人の女が。

「遠坂!?!」

「アーチャー、やめなさい!!」

遠坂が令呪を使用する。セミ男は、何かに弾かれるようにバーサーカーの背中から飛び退いた。

「何をする、リン！」

「るっさい! やっぱりアンタ気にくわないわ! 令呪でやっつけて…」

…あつ」

遠坂は気付く。自分が既に三つ使ってしまった事を。

一、言うことを聞け

二、小便しないで空を飛べ

三、やめなさい

…これは、子供のしつけだろうか。余りの情けなさに遠坂はガックリうなだれた。

「リン、ありがとう。これで私は自由だ。もう私に命令できるものはない！」

「何よ！マスターと契約が切れたならあなたも現界出来ないでしょ！」

その言葉を聞いて、セミ男は勝ち誇ったように言う。

「私は不本意だがアーチャーのクラスで呼ばれている。単独行動が出来るのでね。それに、私はセミだ。短期決戦はお手のものだ。」

まあ、六年地中に居て外でたら一週間の命だから当然だろう。

「では、さらばだ！私は別のマスターにつく！」

そう言って、セミ男は飛んで行った。小便を撒き散らしながら…

「最低ね、あれ。アンタの未来の姿よ？」

「やめてくれ、俺はあんなやつみたいにはならない。…イリヤ、どうする？アイツは強敵だぞ。」

士郎が聞くと、イリヤはつまらなさそうに言った。

「放つといていいわよ。他のマスターなんていないもの。」

「「は？」」

「他のマスターは皆倒したわ。残ってたのはお兄ちゃんとリンだけよ。リンは資格を失ったけど…お兄ちゃんは私の敵？」

「まさか。敵に助けてなんて言わないよ。」

イリヤは満足そうに頷いた。

「なら、聖杯戦争はお終い。元々、サーヴァントが揃わなかった戦争だもの。どうせ門は開かれないうし無効よ、こんなの。さっさと教会に報告に行きましょう。」

呆氣にとられる二人の手をひいて、イリヤは歩きだした。バーサーカーも、その後ろをついて行く。士郎は、何だか納得いかないものの、平和ならそれでいいやと思うのだった。

結局、今回の聖杯戦争はイリヤの言うとおり無効となった。勝手

に自滅したリンなどは飛び跳ねて喜んでいたが、次の聖杯戦争が十年以上先と聞いて、ガツクリとしていた。イリヤは城に戻って平和な暮らしに戻るようだ。全ては終わり、元の日常に戻った。

そんな中、士郎は嫌な予感を抱いていた。結局、あれ以来姿を表さないまま消えて行ったセミ男。しかし、本当にあれで終わりなのだろうか…。

夜。あの日見た時のような綺麗な月を部屋から眺めながら、士郎は未だ消えない手の甲の痣を撫でる。嘘みたいな一夜の出来事。今では少しぼやけかかっている思い出の名残り。

「士郎ー、みかん食べようー！」

脳天気な同居人の声を聞いて、我にかえる士郎。

「あー、今行く！」気を取り直して立ち上がり、部屋を出て行く士郎。そんな彼が閉め忘れた窓の隙間から、一陣の風が吹いた。

風は、士郎の机の上に広げられた本のページをペラペラと捲って行く。しばらくして風が止み、開かれたページには。

『十七年蝉』

…という文字が並んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2252t/>

せいぎのミかた

2011年9月18日14時58分発行